

土 鈴 の は な し

貝 山 久 子

土鈴との出会いは、昨夏家族で七夕見物に仙台へ行き、今年の春に故人となった叔父の家を訪れた時にはじまる。書斎の壁を埋めつくしたおびただしい書物の前に、色も形もとりに置かれた土鈴の数は80もあったであろうか。その素朴なすがたと、やわらかな音色に魅せられて、夫は忽ち土鈴にとりつかれてしまった。自分の旅行の時は云うに及ばず知人や娘共が出かける時も、土鈴をたのむことを忘れない。“亭主の好きな何とやら”で、私もデパートの“〇〇県の観光と物産”などという催しは欠かさず足を運んで、一つ二つ買って来ることにしている。それやこれやで一年余の間に、40近い土鈴が書棚を占領するはめになってしまった。

鈴の発生は極めて古く、キリスト生誕のかなり以前から世界の諸民族に伝えられていたようで、アッシリア人の墓からは青銅の、インカの遺跡からは純金の鈴が発掘されているという。中国ではBC・2000年に青銅の大小の鈴が宗教儀式に使われており、聖書にも鈴のことがみえる。わが国でも縄文時代の遺品の中に土鈴と考えられるものがあるという。最初は楽器として用いられたが、後信仰の対象にもなり、除魔の呪力があるとされていたようで、神社の拝殿の鈴はその名残りかもしれない。

鈴には球形で一方(下方)に切口があり、中に丸(がん)を入れたものと、やや長い円筒形又は円錐形で、下底部は開き。内部に舌(ぜつ)をつるすものがある。スズと云うと何となく球形のものを連想し、いかにも日本的であるのに較べ、ベルと云うとこれはどうしてもラッパ状のもので、西洋を連想する。土鈴は形からいえば、まぎれもなく前者であるが、鈴そのものの形をしているのは、我家のコレクションでみる限りは意外に少なく、石川県と福井県にみられるにすぎない。石川県のものは、九谷焼の本場だけを釉をかけて焼いてあり、素焼のものがコロコロと低音で鳴るのに較べてチリチリとやや高い音がする。木魚に似た形をしたのは更に一般的で分布も広く、大きいのを一つ、又は小ぶりなのを二つもしくは数個束ねて、魔除け又は身代り鈴と称しているようである。このほか各地の郷土色をおりこんだものも多く、たとえば北海道の熊・アイヌ、秋田のほうずき、仙台のこけし、福島県の黒塚の鬼面、京都の大原女、倉敷の白壁の家、高知の長尾どり・鯨、山口県のこま犬・ふぐ、長崎県のオランダ船、大分県の緋鯉・絵馬等々眺めていると思わず笑いをさそわれるようなものも少なくない。目下我家では、地震から土鈴をいかに護るかが重大な関心事になっ

ている。よい知恵をお持ちの方は御一報頂きたい。

紅 葉

木 内 信 蔵

今年は10月上旬に北海道でモミジを眺め、またいま11月に東京の秋色を楽しんでいる。本郷・お茶の水、駒場などの構内のイチョウは言うまでもなく、成城の町や多摩御陵近くの並木のイチョウもみごとである。東大を退官した記念に自ら庭に植えた若樹も季節を知らせてくれるように育った。

ある和独辞書を引いたら、「紅葉 gelbe Blätter」とあった。黄葉の間違いかと言われようが、西ヨーロッパには紅葉が少なく、カシ・マロニエは茶色になるので、紅葉が美しいのは日本や中国合衆国東部で、大陸東岸気候と関係があらうが、和英辞書に「red leaves」とあるのはいかにも機械的で、むしろ「autumnal tint」の方が情景を伝える。

富士山麓の春は梨が原の可憐なフジコザクラが盛りを告げるが、秋は東大寮のカエデとカラマツが山中湖畔を行く人々の足を留める。家の軒先に大葉のカエデがあるが、今年は文化の日にはまだ殆ど朱色にならなかった。年々の気温や日照がどのように関係するか。近所の日当りのよい紅葉はみごとに朱と黄に染められているから、平均のデータだけでは説明できない。

記憶に残るみごとな紅葉は、1940年ごろ石井逸太郎、小寺廉吉両先生をはじめ富山地学会の方々に案内されて訪れた樺平のそれであった。明治節の空はまことに高く、山頂は雪化粧をして中腹は紅葉、黒部は濃い蔭を落として緑がのこっていた。1936年10月にはシャイドル博士(ウイーン)、大久保武彦氏と上高地に行ったが、穂高から梓川の谷に向かって紅葉が下りてくる断面をみることができた。高山のみでなく、多摩丘陵の雑木が色付くのも美しく、都市化で失われるのは惜しいことである。中山の秋は余り知らないが、9月末のアパラチアはそろそろ色付いて「もう10日もすると満山燃えるようですよ」との説明から想像するのみであった。

曇り日の紅葉も棄て難く、深まる秋の思いを一しお濃くする。しかし陽を受けたカエデやイチョウの一枝一枝はゴシック寺院のステンドグラスを透る光のように輝いて、杜の精が舞うようである。山野を飾る紅色は、ハゼ・ウルシ・ツタ・ヤマブドウなどがあり、サクラ・ミズキ・ニシキギ等も